



動物言語学者、東京大学 先端科学技術研究センター 准教授

鈴木 俊貴さんに聞く

〔聞き手〕 川島 葵さん フリーアナウンサー



動物言語学という 新たな分野を切り拓き 生き物の常識を覆す

C L O S E U P

すずき・としたか

1983年生まれ、東京都出身。幼少期から生き物に強い関心を持ち、動物学者を目指して東邦大学理学部生物学科に入学。同大学大学院に進学後、在学中にシジュウカラが言葉を使っていることを発見。2008年、立教大学大学院理学研究科博士後期課程に進学。2023年に東京大学先端科学技術研究センター准教授に就任。2025年、英・動物行動研究協会の国際賞受賞が決定。

鳥の言葉の世界を伝える本を上梓^{じょうし}

川島 今回のクローズアップ・インタビューのゲストは、動物言語学者の鈴木俊貴さんです。鈴木さんは世界で初めてシジュウカラが言葉を話していることを明らかにし、動物言語学という新たな分野を開拓されました。シジュウカラの言葉に関する論文が『Nature Communications』や『PNAS』などの一流科学誌に掲載され、数多くの賞を受賞されています。2025年1月には、初の著書となる『僕には鳥の言葉がわかる』（小学館）を出版されました。掲載されたイラストもご自身で描かれています。私もシジュウカラの鳴き声を想像してわくわくしながら読ませていただきましたが、読者からの反響はいかがですか。

鈴木 シジュウカラが鳴いている動画を撮って、「この鳥はこんなことを話しています」といったコメントとともにSNSに上げてくれる読者もおられます。私が本を通して伝えたかった動物言語学の面白さが伝わっている実感があり、とてもうれしく思います。

川島 巻末にはシジュウカラの声を聞ける二次元コード

が掲載されています。シジュウカラの声について読み進め、最後に本物の声を聞けたことで、読み終わった後のご褒美のようでした。

鈴木 音声も私が研究活動で録音したものです。例えば、へビに出合った時にしか出さない珍しい声も収録されています。

川島 実際にシジュウカラの生の声を聞いてみたいと思っているのですが、なかなか出合えないものですね。

鈴木 シジュウカラは東京の都会にも生息していますが、実はスズメと同じくらい身近な存在ですが、その声が環境音の一部となっていて、気付けないだけかもしれません。私が本を書いたきっかけの一つが、環境音の中に実は鳥の言葉の世界があることに気付いてほしいと思ったことでした。これを機会にぜひ鳥の声に耳を傾けてみてください。



鈴木 俊貴さん

バードウォッチングを通して

真の動物観察に目覚める

川島 動物言語学の道を邁進まいしんされている鈴木さんですが、どんな少年時代を過ごされたのでしょうか。

鈴木 子どもの頃から、生き物が大好きで、虫や魚を捕り、観察して楽しんでいました。例えば、捕まえた虫がもともと住んでいた環境を虫カゴの中に再現して観察する。そうすれば、生き物たちがこの世界をどのように見ているのか分かる気がしたのです。高校生の時、鳥をしつかり観察したいと思い、お年玉をためて双眼鏡を購入しました。双眼鏡で自然の中に生きる鳥を観察していると、餌を探したり、天敵に立ち向かったりしながら生きている姿が見えてきました。そして、今まで虫カゴや水槽で観察していた世界とは全く違うことに気付きました。虫カゴや水槽の環境は自然の一部を切り出したもので、天敵もないし、餌も与えられる、私たち人間が管理している環境です。そのような中で生き物を観察しても、本当の彼らの世界を知ることにはならないと、その時、初めて気付いたのです。幼い頃、『ファール昆虫記』な

どを読んで、動物を研究して学者をやっている人たちがいることを知り、自分もそうなりたいと思っていましたが、双眼鏡を購入してからバードウォッチングをするようになり、将来は鳥の研究をしたいと考えるようになりました。

川島 幼少期からすでに、生き

物に対する独自の視点を持っていたのですね。東邦大学理学部生物学科に進学された理由を教えてくださいませんか。

鈴木 アホウドリ研究の第一人者である、長谷川博先生が教壇に立たれていたからです。長谷川先生はアホウドリの繁殖地である無人島で保護活動を続け、絶滅の危機にひんしていたアホウドリを復活させました。私はそのことに大きな感銘を受けて、長谷川先生の背中を見るだけでもよいので同じ大学で勉強したいと思い、東邦大学の進学を決めました。入学後、私は他の研究室に所属していたのですが、長谷川先生とはとても親しくさせてい



川島 葵さん

ただくようになりました。先生は、学生でも教員でも議論する時は対等だという姿勢を持たれており、研究室はとてもオープンで、よく出入りさせてもらいました。また、バードウォッチングの時間も以前より増え、大学生活はとても充実していました。

シジュウカラが発する “言葉” 研究テーマとの出会い

川島 大学3年次にシジュウカラの研究を始められたそうですが、テーマに選んだ理由は何だったのでしょうか。

鈴木 私は動物が何を考え、どう暮らしているのかに興味があったことから、動物行動学の道に進みました。研究テーマを見つけるに当たって、国内各地を訪ねてテーマとなる動物の行動を探し回りましたが、ピンとくるものを見つけることができませんでした。そんな時、長野県にある大学所有の山小屋に安く泊まれると聞いて、しばらく滞在してみたのです。その時、シジュウカラがいろいろな声を出していることに、初めて気が付きました。例えば、タカが出たら「ヒヒヒ」と鳴いて、仲間を呼ぶ



時は「ヂヂヂ」と鳴いているのではないか？異なる声を出しているのはだたためではなく、言葉として使い分けられているのではないか？そう考えて、研究してみることにしたのです。

川島 最初に森の中で、「これは言葉ではないか」と気付いた時はどのように感じましたか。

鈴木 その時はまだ自分の中の言葉の定義も曖昧で、鳴き声に何か意味があるのではないかとしか思いませんでした。しかし博士前期課程まで研究を続けていくうちに、「これは人間の単語に当たるのではないか」、「これは文になっているのではないか」という新たな発見がありました。これまで人間にしかないと思われてきた言語能力を、シジュウカラが持っている可能性が出てきたのです。私は子どもの頃から、動物を観察していて図鑑に載っていることと違うと気付くと、それを書き込んでいました。しかし、今回の発見は私が科学的に証明しなくてはいけないと思い、研究に一層打ち込みました。

言語は人間だけのものなのか？

動物言語学という新たな分野

川島 2022年にストックホルムで行われた国際行動生態学会では、日本人で初めてかつ史上最年少で、基調講演をなさいました。その際、シジュウカラの研究に基づいて、世界で初めて動物言語学という分野を提唱されましたが、その着眼点はどのようなものだったのでしょうか。

鈴木 それまで、動物言語学という分野は存在しませんでした。なぜかというと、言語は人間だけのものだと考えられてきたからです。人間だけが言語を持っていて、言語を持たないものを全て動物だと考えてきたのです。しかし、シジュウカラの研究を通して、それが誤りであることが分かりました。人間には人間の言葉があるように、シジュウカラにはシジュウカラの言葉があり、どちらも動物の言葉の一つに過ぎないのです。そうした観点がないと間違いが起きます。間違いの一つは、研究者でさえ「動物は言葉を話していない」と思い込んでいたこと、もう一つは「動物も人間のように話す」と思い込んでい

たことです。人間には人間に適した言葉があり、チンパンジーにはチンパンジーに適した言葉があるので、それから、動物たちは人間のように話す必要はないのです。そうしたフラットな視点で自然を研究することで、私たちの自然観は大きく改善されると思っています。動物言語学の研究が発展すれば、言葉が進化する上での普遍的なルールが分かってくるかもしれません。将来的には、ペットなど動物との関わり方も改善される可能性もあります。もっと人間と自然とが共生していける未来が拓けるかもしれない——そんな思いを込めて、動物言語学を提唱しました。

川島 会場におられた研究者の皆さんの反応はいかがでしたか。

鈴木 基調講演では古代ギリシャの時代から人間だけが言葉を持っているとしてきた歴史を批判しつつ、自ら動物たちが暮らすフィールドに入っていくって研究することの重要性を主張しました。その上でシジュウカラの研究結果を発表したのですが、発表が終わると、多くの研究者たちがいろいろな賞賛やコメントをくれました。中でも「これまで言葉は人間だけのものだと思い、人間と動

物、人間と自然のような二分法で考えていたが、それは間違っていることをあなたが証明した」と言われたことがとてもうれしかったです。その後も多くの研究者からメールが届き続けるなど、学問が大きく動き出す瞬間を実感することができました。

世界に広がる動物言語学研究

川島 動物言語学を提唱されてから3年目になりますが、その間にどのような動きが起きているのでしょうか。

鈴木 基調講演を聞いてくれた研究者の中に、独自に動物の言葉を研究する人が現れて、動物言語学に関する論文が少しずつ増えてきています。例えば、アフリカゾウは人間に聞こえないような低周波の声で会話をするのですが、相手によってその声を変えている可能性があるという論文が発表されました。また、チンパンジーの言葉にも文法がある可能性を示唆する論文も出ています。シジュウカラは世界各地に分布する鳥なのですが、ヨーロッパの研究者たちが自国のシジュウカラの言葉について調査する動きも出てきています。



川島 動物言語学が世界中に広がりつつあるんですね。

鈴木さんは2023年に東京大学先端科学技術研究センターの准教授に就任して、世界初の動物言語学の研究室を立ち上げられました。現在は、どのような思いで研究を進めておられますか。

鈴木 研究室ではシジュウカラをはじめとした鳥類だけでなく、学生たちはモモンガやネズミなどの哺乳類の言葉

の研究も行っています。私はシジュウカラの言葉について20年近く研究してきましたが、どんどん新しい発見があり、一生かけても研究し切れないと感じています。世界にはたくさん種類の動物がいて、鳥だけで1万種類以上、哺乳類も5千種類以上います。そんな動物たちの言葉を1人で研究するのは不可能です。動物言語学という分野を作った背景には、私がいなくなった後も動物の言葉に関する研究が続いてほしいという思いもありました。

川島 シジュウカラが言葉だけでなく、ジェスチャーを使うということも発表されていますが、これも大きな発見だったのではないのでしょうか。

鈴木 これまでジェスチャーをする動物はチンパンジーなどの霊長類に限られると考えられていたので、反響は大きかったです。ジェスチャーが進化する上で重要なのは、2本の脚で立つことだといわれています。なぜなら腕を自由に動かせるからです。その点、人間と同様に鳥も2本の脚で立つことができますし、人間の腕に当たる翼を動かすことができます。鳥類学者は鳥の翼は飛ぶための器官だと思い込んで、飛んでいない時の役割に注目して



きませんでした。しかし私は、鳥も2本の脚で立つのだから、翼をコミュニケーションに使っている可能性もあると考えたのです。研究を続けた結果、翼をバタつかせ

て「お先にどうぞ」と巣箱に先に入るように促すようなジェスチャーをできることが分かりました。それを発表すると、シジュウカラが飛んでない時でも翼を動かしていることに気付いていた国内外のバードウォッチャーたちから、たくさんお問い合わせメールが寄せられました。

川島 動物に詳しくない私でも、お話を聞いていて胸が高鳴ります。動物の研究をされてきた方々は、先生のお話を聞いて、自分がずっと見て聞いてきたものに対して、そういう観点があったのかと、目からうろこが落ちる感覚を覚えたのではないかと思います。

鈴木 本当の科学の発見ってそういうものだと思います。目の前にある事象に誰も気付いていなかったことがある、それに気付く、そのことがとても大事だと思います。今、窓から見える都会の緑地にもシジュウカラはいるはずですが、離れていて見えないから、それに誰も気付かないだけなんです。

プロセスを楽しむことが大切

川島 これから研究をどのように発展させていきたいと

考えていますか。

鈴木 動物言語学の研究が発展していけば、将来的に動物の言葉が分かる未来が必ず来ると思っています。また、研究を通して生き物たちがとても豊かな世界を持っていることを知ってほしいと思います。私自身、シジュウカラが言葉を話していることを知って、人間として成長できたように思います。鳥の言葉が分かったら、世の中がもっと楽しくなると思いますか。

川島 本当にわくわくしてくるお話ですね。鈴木さんが研究を心から楽しんでい

ることが伝わってきます。

鈴木 研究で一番わくわくする瞬間は、プロセスにあるんです。今の時代、インターネットで検索したり、AIに質問したりすれば、何らかの答えがすぐに得られます。それで満足してしまう人が増えていますが、それが世の中をつまらなくしてしまう気があるのです。例えば、受験勉強を頑張って不合格という結果になったとしても、それまでの努力は必ず糧になっているはずですよ。



だから、結果を重視する今の風潮はよくないと思います。プロセスを楽しめれば受験勉強も楽しくなるかもしれないし、実際、私も失敗も含めて研究を楽しんでいます。そのことを、本などを通して広く伝えたいと思います。

川島 お話を聞いて、今まで移動中につけていたイヤホンを外して、シジュウカラの声に耳を傾けたくなりました。

鈴木 自然観察って本当に面白いんです。私たちが使っている知識は過去に誰かが発見したことを言語化したものですが、まだ言語化されていない現象は身近な自然の中にたくさんあります。それに気付くことは研究者でなくてもできます。普段から自然をちょっと意識してわくわくを感じられれば、もっと世の中を楽しく感じられるし、生き物や周りの人たちに対してもう少し優しく

なれるかもしれません。

川島 日々の生活の楽しみが一つ増えたように思います。本日はありがとうございました。